

持ち歩ける硯 !?

— 中久世遺跡出土の中空円面硯 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真 1 中久世遺跡から出土した中空円面硯

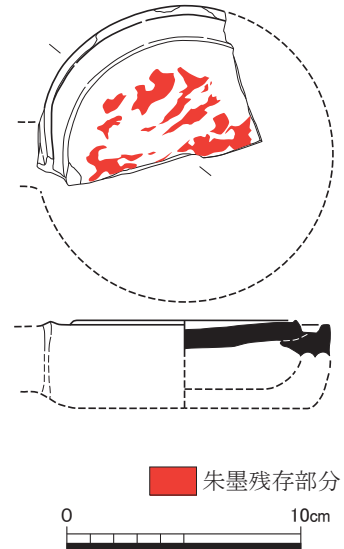


図 1 中空円面硯実測図 (1 : 4)

はじめに 令和 5 年度に京都市南区の中久世遺跡で行われた発掘調査で、1 点の陶硯(焼き物の硯)が出土しました(写真 1、図 1)。この陶硯は、中空円面硯とよばれる特殊な形態をしたもので、京都市内では初の出土事例です。今回は、この陶硯について紹介したいと思います。

中空円面硯とは 古墳時代後期から奈良時代前期までのごくわずかな期間だけ使用された硯で、平面形態がまるい円面硯の一種です。ただし、一般的な円面硯が、墨を磨る硯面の下に裾広がりの台がつくのに対して(圈足円面硯)、こちらは硯面の下に碗状の台がつけます。内部が中空になることから中空円面硯とよばれます(図 3)。

中空円面硯といってもその形は多様で、高台がつくものや、硯面の縁辺 1 か所に筆立てがつくものもあ

ります。特に多い形は、側面に把手がつくもの(把手付中空円面硯)で、今回出土資料はこれにあたります。写真 1 の右側、硯面の縁辺が歪んでいる部分をよくみると、欠けた把手の付け根部分がわずかに残っています。

把手は、他の事例を見ると筒状のものが多く、その場合は硯本体の空洞とつながっています。また、把手上部の付け根や先端には孔が 1 か所開けられています。孔から液体を注げば、筒状の把手を通して、硯本体の空洞に液体を溜めることができる構造になっています。

使用方法 空洞には液体を溜めることができるので、墨を溜めていたのではないかと考えられます。今回出土硯も、硯面には長時間磨りつ

づけたことで朱墨が多量に付着していますが、空洞内部に墨の痕跡は見当たりません。空洞の使用方法には様々な説がありますが、水を入れたという説が最も有力です。水は、把手上部の孔からさし込んだ筆先に含ませ、墨を磨る際に使われたようです。つまり水滴の機能をも備えたハ

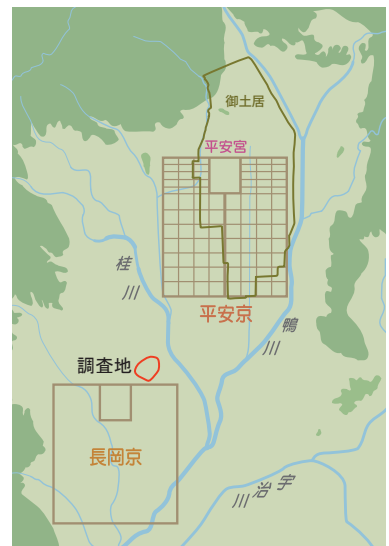


図 2 調査地位置図

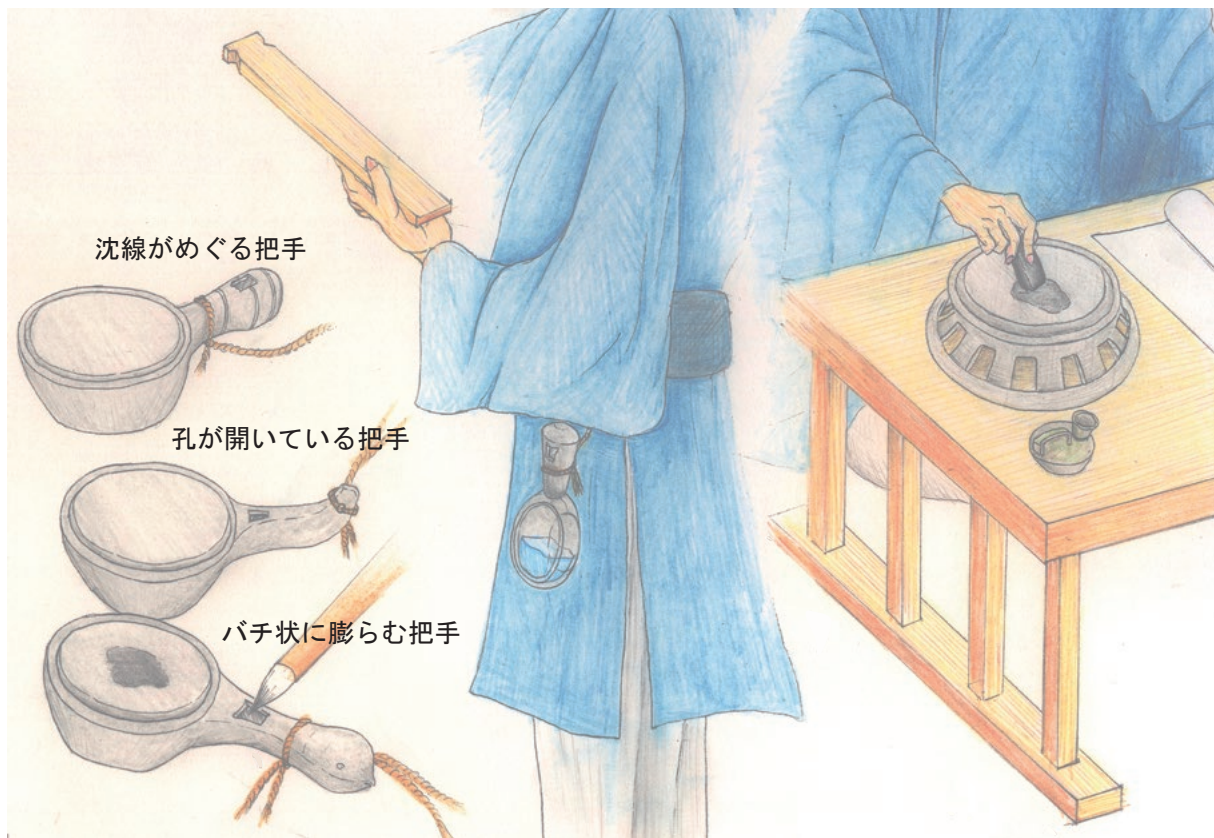


図3 把手付中空円面硯(左)と圈足円面硯(右)

イブリッド型の硯というわけです。

また、把手をよくみると、先端に孔が開いていて紐を通せるようになっているもの、把手先端がバチ状に膨らんだり、把手付け根に沈線がめぐらされたりして紐を巻きつけられるようになっているものがあります(図3左)。いずれも把手を上にして、腰に硯をぶら提げていたのではないかと考えられています。たしかに、把手を上にしてぶら提げれば、空洞内の水もこぼれる心配はありませんよね。水と一緒に持ち歩ける携帯用の硯というわけです。

さらに、出土状況からも具体的な使用方法をうかがうことができます。遠江国引佐郡の郡津と指摘される静岡県井通遺跡では、運河と考えられる大溝と、それに接続して敷地を北・中央・南の3つに区画する小溝が見つっています。南区画で

は複数の掘立柱建物の付近で、多量の食器、文書校正用の朱墨が附着した硯、机に置きやすい圈足円面硯が出土しており、施設の管理棟が置かれた空間と考えられています。一方で北・中央区画では倉庫とみられる総柱建物が複数立ち並び、その周囲では計量カップ状の土器とともに中空円面硯が見つっています。南区画で出土したような食器や硯は見つかっていません。このことから中空円面硯は、倉庫など机がないような場所でも資料の作成ができるよう生み出された、携帯用の硯ではないかと言われています。

出土地の傾向 出土地の傾向としては、古墳に副葬された事例や、窯跡や集積場で焼成不良品として廃棄された事例がやや多く見られます。ただ、こうした場所から出土する硯は、いずれも文書作成業務を行う

ためにその遺跡で実用されたものではないでしょう。

これらを除けば、出土地は官衙の出先機関と想定される遺跡に多いです。前述の事例のほか、官衙付属の倉庫の存在が推定されている遺跡や、天皇行幸に伴う行宮整備工事に関係するとされる遺跡もあります。

今回出土資料 今回出土した中空円面硯は、奈良時代後期の掘立柱建物の柱穴から出土しました。ただし、硯本体は奈良時代前期より前のものと考えられるため、硯は前身の建物で使用されたと考えるべきでしょうか。先の事例にみたように、中空円面硯は官衙の出先機関と想定されるような遺跡からも出土しています。中久世遺跡の周辺にもそうした施設がかつて存在していたのでしょうか。想像は膨らむばかりです。

(中谷俊哉)